

パリ通信・第169号

ザッキン美術館「ザッキン〜アール・デコ」展

1925年パリ万国博覧会(現代装飾美術産業博覧会、通称アール・デコ博覧会)から百年が経つ。第一次世界大戦の影響により開催が延期されてきた万博で1925年4月から11月に実現した。過去の伝統から解き放たれた現代フランスのアール・デコ(装飾美術)を推進する芸術産業イベントで、ヨーロッパを中心に21ヶ国が出展、1600万の入場者数を誇った。

パリ・アレキサンダー3世橋からアンヴァリッド、グラン・パレとプチ・パレ、セーヌ川沿いに150のパビリオンが立ち並び大成功を納め、「アール・デコ様式」を世界中に知らしめたのである。アンドレ・グルー、ピエール・シャロー、ル・コルビュジエ、ロベール・マレ・ステヴァンスと言った錚々たるインテリア・デザイナーや建築家たちがパビリオンを手掛け、彫刻家ポンポン、ザッキンらも動員された。アール・デコ博覧会百周年を記念してザッキン美術館では「ザッキン〜アール・デコ」展(2025年11月15日から2026年4月12日まで)が開催されている。

ザッキン美術館はパリ・リュクサンブール公園の南、6区アサス通り(100 bis, Rue d'Assas)にある。ザッキンとその妻ヴァランティエヌの住まい兼アトリエだった場所で、庭にはザッキンのブロンズ像が配されている。オシップ・ザッキン(1888-1967)は1888年ロシア・ヴィテブスク(今のビエロルシ)に生まれ、イギリスで芸術を学んだ後、1910年からパリに住み1921年フランス国籍を取得する。



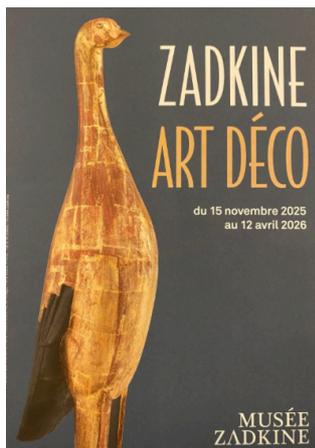
ユダヤ人であったが故に第二次世界大戦中はニューヨークに亡命。キュビズムに位置付けられるザッキンだが、同時代のアイリーン・グレイ(1878-1976)とアンドレ・グルー(1884-1966)との関係を紹介しながら、1920-1930年アール・デコ芸術に深く貢献していたことに注目したのが今回の展示である。

アイルランド生まれのアイリーン・グレイは1906年からパリに住み、漆工芸の手法を日本人菅原精造に学んでいる。アール・ヌーボーの有機的デザインを経て、より単純化された直線や幾何学を使ったシンプルなフォルムに移行するのがアール・デコで、トータル・インテリアとしての家具や調度品の洗練された「素材」が重要な要素

となり、漆という東洋の新しい「素材」を取り入れたのである。

アイリーン・グレイは1922年パリにギャラリーを開き、インテリア・デザイナーとして自身の家具や椅子、絨毯などを展示すると共に、ザッキンの彫刻も置いていた。画家藤田嗣治を介してアイリーンはザッキンと知り合い、ザッキンの作品を購入し、交友関係は生涯に渡る。また、ヴァランティエヌとの結婚の証人でもある藤田を介してザッキンは日本の二科会にも海外出展する。1923年からは彫刻を出品し、大正・昭和前期だけでなく、戦後においても日本の芸術家たちをパリに受け入れ、大きな影響を与えている。

1920年代後半、フランス・アール・デコにおける重要なインテリア・デザイナーと見なされていたのがアンドレ・グローで、モード界で活躍する妻ニコル・グローと共に当時のパリを牽引していた。高貴な素材を用いて、シンプルで荘厳なフォルムによるインテリア構成は、高級ホテルや裕福な個人邸宅など、ピュアで豪華な空間を創造し、その装飾性は高く評価された。グローとザッキンのコラボレーションは1926年に始まる。パリ・パッシーに建設中の「マイヤン邸」の内装を担当するグローがザッキンに外壁の装飾を依頼した。素材にこだわる二人の協力関係は良好で、ザッキンはニコルのブロンズ像も残している。



展覧会の広告画像としてアール・デコ期のザッキンを代表する作品としてメインに据えられたのが「金の鳥」(1924年)(石膏に彩色と金箔)(98x20x23 cm)である。浄化された線と幾何学的なフォルム、石膏に赤い彩色を施し、四角い金箔と黒い尾が装飾性を強調している。

百年経った今でもフランス・アール・デコはその魅力を失っていない。ザッキン、藤田、ピカソなどエコール・ド・パ

リ派と称される外国人芸術家と彼らを取り巻く人々がパリで切磋琢磨しながら芸術を牽引していた時代から学ぶことは今なお大きいと思う。

(古

賀順子記)

编者注

菅原精造について調べようとしたが精査はできませんでした。

私にわかったことは彼は1884年(明治17年)1月29日生まれ、1905年11月17日横浜港より渡仏、1937年4月12日。本稿に記載があるようにアイリーン・グレイ(1878-1976)とアンドレ・グルー(1884-1966)に日本の漆技を教えている事実は外国文献にある。



参考図書紹介

菅原精造 《フランス工芸界に多大な影響を与えた幻の巨匠》

明治38年渡仏、生涯を異国の地で漆工芸の発展に尽くした「幻の巨匠」。

その謎の生涯と業績を元フジTVパリ支局長が執念の調査で再現。

フランスの漆工芸に多大な影響を与え、今なおその業績が語り継がれていながら、日本ではほとんど忘れ去られた「幻の巨匠」がいる。

菅原精造――。本書は元フジテレビのパリ支局長だった著者が、ふとしたきっかけでその名を知り、二十年の歳月をかけて生涯をたどった異色の評伝である。

一八八四(明治十七)年山形県の酒田に生まれ、十七歳のときに上京し、東京美術学校の漆工科撰科に入学。日露戦争が終結した一九〇五年晩秋、二十一歳で横浜からフランスへ出航、その後一度も帰国せず、生涯をパリ中心に過ごした。

菅原は渡仏後すぐ、工芸の道を志し、ロンドンからパリに戻ったアイリーン・グレイとの知遇を得、彼女と共同制作した「夜の魔術師」をサロンに初出品、評判を呼ぶなど、次第に漆芸家としての地歩を固めていく。

著者は数少ない手がかりをもとに、ついに遺族の存在を突きとめ対面、遺された作品はないとの定説を覆して数点の遺品と対面する。菅原はパリで何を目ざしたのか。藤田嗣治をはじめ、数多くのパリ在住の日本人との交流を中心に、著者は執念の調査で描き出している。



藤田嗣治について

湯原かの子 新潮社(2006年)

藤田の評伝です。日本の妻に宛てた手紙、第一次世界大戦、エコール・ド・パリ、戦争画など資料とともに藤田の生涯を辿っています。

藤田嗣治について

- エコール・ド・パリを代表する画家で、西洋画の技法と日本的感性を融合させ、世界的に名声を博しました。
- 晩年は洗礼を受け「レオナルド・フジタ」となり、ランス大聖堂に壁画を奉納するなど、晩年まで精力的に活動しました。🔗

この本は、藤田嗣治という芸術家の人間性や、彼を取り巻く時代背景、そして芸術への情熱を知る上で非常に興味深い一冊とされています。🔗

藤田嗣治 パリからの恋文 | 湯原 かの子 | 本 | 通販 | ...

本書は、芸術家の評伝を専門としている淑徳大学教授の湯原かの子氏に...

Amazon.jp



藤田嗣治 パリからの恋文 原かの子 - smokebook

新潮社 ハードカバー カバー 15×20×2.5 本の状態 表紙すれ

smokebooks shop